
魔法少女リリカルなのは ~平和に生きる転生者~

如月 龍斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～平和に生きる転生者～

【Nコード】

N9165V

【作者名】

如月 龍斗

【あらすじ】

俺こと木下弘樹は死んだらしい。しかしそれは神サマのミスで転生させてもらえるらしい。幼馴染の神代悠美と一緒にだが……

ありがちなプロローグ

俺こと木下宏樹は大きな問題に直面していた。

俺はさつきまでアニメを借りにTUT YAを目指して友達と歩いていたはずだ。しかし、隣を見ても誰もいない。

「……………どうなってんだ？」

見渡す限り白。真っ白。いつのまに俺は病院に来たのだろうか？

それにしてもここはどこだろうか。白いだけで何も無い。

「すこし歩けば景色も変わるか……………？」

そんなことを思ったおれは「待つんじゃない」「……………後ろから声が聞こえる、振り返ると立派な髭のお爺さんがいた。誰だよ。

「わしは神じゃよ」

っ！！

心でも読めるのか？

「ああ読めるとも」

「神……ねえ、非科学的なもんは信じないつもりだったが……心を讀むっていうなら納得できる……でその神サマが一般人の俺になんのようだ？」

「それがのう……お前さんは死んでしまったのじゃ。」

「……は？」

「この爺はなにぬかしてんだ？」

「冗談ではないぞ。お主達は乗り物に轢かれて死んだ。」

「なっ！！」

「なん………だって………？」

「そんな………もう俺の人生終わりかよ………!？」

「それが………わしのミスなんじゃよ。」

「この爺………!!!!!!」

「さて、じゃから生き返らせようと思っておるのじゃ。」

「生き返れるのか？」

「ああ、じゃが元の世界は無理じゃ。じゃから別の世界に転生させようとおる。」

転生？あの二次創作とかでよく見る転生？

「そうじゃ、ああ安心せいお前さんの友人も同じ世界に転生した。」

「……………ちよつと待て、転生『した』だと？」

「ということはもうあいつは転生した後なのか？」

「そうなんじゃよ、お前さんは魂が強固での。連れて来るのに時間がかかったわい」

「魂？」

「そうじゃ、魂というのは人間そのものの価値が具現化したものじや。それが強固ということは人間としての価値が大きかったということじゃ、誇ってもよいことじゃぞ。」

「そうなのか？誇るって言ったってよくわからないが。」

「まあそれはいいわい。その世界の情景を教えよう、お主が生きていた世界とほぼ同じ世界で科学が主に発達してある。しかしその世界には魔法の存在がある。」

「……………ん？」

「そしてその世界の名前は

『魔法少女リリカルなのは』の世界じゃ。」

「……………ヲイ。」

「どうしたんじゃ？」

「……………他の世界にはいけないのか？」

「お主の友人がその世界にいつてしまったから無理じゃの。」

なん……だと……？

「なぜ……なぜあいつはそんなに死亡フラグ満載な世界を選んだんだ……！！！」

第一期で次元震が起きて世界崩壊の危機、第二期で闇の書の暴走で地球滅亡の危機、10年後の第三期は世界征服の危機だぞ……！！？

「……そんなにきついのかのう？」

「ああ……数々の二次創作でりりなのは見てきたがなにかと介入すると死にそうになるんだぞ……？」

「そ、それは……ご愁傷様じゃ……。」

「ぐ、他人事だとおもいやがって……！」

「そんなつもりじゃないんじゃがのう……。」

っは！

そうだ！！

「おい！神サマ！！転生するにあたってなにか能力とかくれないか！？」

そう！テンプレ転生！これでチート能力をもらえば死亡フラグも回避できる……！！

「できるぞ。」

「よっしゃー！……これでかつる！……！」

「じゃが三つまでじゃ。」

ちよw

なんでだよwww

「世界のバランスが崩れるからじゃ、仮に転生に成功したとしてもすぐに世界に消されてしまっじゃろ。」

「マジか……え？じゃあ他のアニメの能力とかも……」

「当然アウトじゃな。」

ジーザス！！

神はいなかった！……いや目の前にいるか。

「くっそう、なにか考えねえと……！！！」

俺の保身のためにも！！！！

ありがちなプロローグ（後書き）

どんな感想でもいいのでください
でも批判はやめてほしいです・・・

ありがちなプロローグ2

よし！

「決めたぜ・・・神さま・・・ッ！！！！」

「なぜかお主の顔が劇画タッチに見えるんじやが・・・」

「ええい！うるさい！！真剣に考えねえと簡単に死んじゃまうような世界だぞ！？そりゃあ劇画タッチにもなるわ！！！！」

「そ、そうか・・・で能力はどうするんじや？」

よし、一つ目は・・・

「おれに究極的な頭脳をくれ、りりなの世界にいるスカさんよりももう一ランク上の頭脳を。」

「了解じゃ、しかしどうして頭脳にしたんじや？」

「頭が良ければどんなものでも作れる。それでデバイスを魔改造す

ればすこしは死亡率が下がるとおもってな。しかも頭がいい「演算能力も高いからな、魔法を使うにあたっても有利のはずだ。」

「お主……実はすごく真面目に考えとったんじゃない……」
「は？なにいつてんだ？」
「そんなのあたりまえだろ？」

「あたりまえだ、転生してすぐには死にたくない。」

「まあそうじゃろうが……二つ目はなんじゃ？」

「二つ目は『どんなものでも生み出せる程度の能力』だ」

「いいじゃろう……しかし無機物しか生み出せないぞ？」

「ふっふっふ、それでもいいのさ。」

「いいんだ、で、神サマ質問だ、その世界に無いものを自分で生み出したらその世界はそれを拒絶するか？」

「いや作りだしたのなら大丈夫じゃろうが……まさか!？」

「そうだぜ神サマ!」

「お前の思っている通りだ!!」

「そのとおり!!ないなら作ってしまえばいいじゃない!!MSでも何でも無ければ作ればいいじゃない!!」

「な、なんとというやつじゃ……しかしそのくらいなら大丈夫じ

やるぞ。」

「よっしゃー！！ならばこれでOKだ！残り一つは身体能力と魔力を常識の範囲であげてくれ。」

「了解じゃ、ならこのまま転生させるぞ。」

よし頭脳チートももらったし、これでやれるぞ！

「あ、タイムそついやあいつはどんな能力もらったんだ？」

「あの子は『日本人に生まれる』『木下宏樹と知り合いになる』『ある程度の幸運が欲しい』じゃ」

「ある程度の幸運のところにあいつが滲み出てる感があるなあ……」

「そうなのかのう？どうしてなのじゃ？」

「あいつは不幸でなあ、某上条さん並みに。」

「それは不憫じゃったのう……」

「だがしかし！！あいつは異常にもてる、男女関係なくもてる、告白なんて何回もされてるくせに全然OKしないし、しかもそのツケは俺にくるんだ……！！何回背中を刺されそうになったか……」

『悠美様のために死んでください！！』なんてどこのヤンデレだよ……

「それはまた壮絶じゃな・・・」

「ああ・・・次の世界でもそうなるのか・・・？」

「なりそう・・・じゃな・・・」

ああ、気まずい・・・。

「・・・」

「・・・」

「・・・行ってきます」

「・・・頑張るのじゃぞ」

ハア、幸運なのか不幸なのか分からん・・・

新しい世界で（前書き）

何か俺書くの遅いなあ・・・
毎日更新してる作者さんたちはどうやってるんだろっ？

新しい世界で

転生してから五年たった。特に変化はなく名前も前世のまま木下宏樹だ。

あ、そういえば五歳の誕生日の時に前世の記憶を思い出したのだ。だから数々の二次創作のオリ主が受けた羞恥プレイはなかったよ！！

ちなみに性別は名前からも分かる通り男のままだ。容姿は前世の子供の頃と変わっておらず、可もなく不可もなく平凡な容姿だ、もし女に生まれていたらと思うと怖いので考えるのを止めた。

そして俺の転生特典の『どんなものでも生み出せる程度の能力』だが、確かに使えた。頭の中で出したいものの名前を唱えたら出てきた。一番最初に使ったときはいきなり目の前にエロh・・・ゲフンゲフン・・・聖典がでてきたので焦った。しかも俺が前世で愛用していたものだったのでさらに焦った。とりあえず自分の部屋の本棚の裏に隠しておいた、もし見つかったら父さんのせいに行けるから安心だ。

あとこのままだと機械を弄ったりデバイスを作成することができないので、押し入れを改造することにした。改造といっても空間を捻じ曲げて別の空間をつくるので改造と言えるかは謎だが。今すぐには実行はできないので後回しだがせめて七歳ぐらいまでには作りた

い。

そんな記憶を思い出した誕生日から数カ月。

せつかくリリカルな世界に生まれ変わったので原作キャラは一目でもいいから見てみたい。ということで早速翠屋に行ってみよう。

「お母さん、ちょっと翠屋っていう喫茶店を見てくるね。」

「あら、だったらシュークリームを六つ買ってきてくれるかしら。あそこのはシュークリームは絶品なのよ。」

「わかった〜」

「あと明日は家にいるようにね。」

「？はい」

明日？何かあったけ？……まあいいや！

よし、翠屋にいくぜ！

つとということて翠屋にやつてきたよ！
取りあえず高町夫妻、あんたら若過ぎだ。誰がどう見たって二十台
くらいにしか見えないんだが。とりあえず高町なのはもいないよう
だしシュークリーム買うか。

「すいませーん」

「はい・・・あら？小さいお客さんね、お使いできたの？」

「はい、そーなんです。」

「なのはと同じ年くらいなのに偉いわねー」

そういつて頭を撫でられた、頭を撫でられた！！大事なことなので
二回言いました！

「えへへー」

つく！

オリ主のはずの俺が逆にナデポ・・・だと・・・悔しい！でも）
ry

「そうだ！せつかくだしなのはとお友達になつてくれない？」

友達か・・・変にフラグさえ立たなければ大丈夫だろ。

「お友達に？いいよー！」

「じゃあちょっと待っててね。・・・」
・・・なのほ〜！ちょっとこっちにいてくれる〜？」

「わかつたの〜！」

これがsetsでは魔王になるという人物か・・・ッ！！極力お友
達でいることに気をつければフラグなんて立つまい。しかも、何て
言ったてまだ俺は5歳なんだぜ？
そんな歳であの子が好きなんて言っても子供の戯言程度にしか思わ
んはずだから気にする必要もないか？

「あらどうしたの？そんなに考えこんだ顔して？」

「いえ、なんでもありません。」

そんなに顔にでていたんだろうか？次からは気をつけよう。

「取りあえず二人とも自己紹介しちやいなさい」

「えっと、わたしのなまえはたかまちなのはっていうの、いまは4さいなの。」

「はいよくできたわね、なのは」

そういつて桃子さんは高町なのはの頭を撫でた。

「えへへー」

さっき俺が頭を撫でられた時と全く一緒の反応をさせた……！？
流石桃子さんすごい。

「さっ、今度は君の番よ。」

まあ無難にいつときや大丈夫だろ。

「俺の名前は木下宏樹、今は5歳でここから少し離れた場所に住んでるんだ。」

「ひろきっていつの？」

「ん？うん。そうだよ？」

どうしたんだ？わざわざ名前を聞き返すなんて？

「じゃあひろ君って呼ぶね!」

「え、あ、うん。」

いきなり名前で呼ぶなんて……照れるじゃないか……

「よ、よろしくな。高町。」

「なのはだよ?」

「?」

「なのはってよんで?」

そうだな、あっちだって名前で呼んでるし俺も名前で呼ぶか。

「わかった。よろしくな。なのは。」

「うん。」

「またきてね」

「またなの」

「さようなら」

あ後は普通に子供らしい遊びをしてました。

俺の精神に来るものがあつたがそれは我慢だ。なにが悲しくて高校生（精神だけ）がママごとをしなければならなかったのか、だが途中で放心したからほとんど覚えていない。きっと俺の本能が忘れとけっていつてるんだよね……？

そつえばさつき母さん（頭の中ではこう呼んでいる）が明日は家に居なさいって言うてたけどなんだろつか？家族の誕生日……じゃないし、母さん達の結婚記念日でもないはずだ。うん……
・思いつかん。

……

……

……

……

結局家に着くまで考えたが全く思いつかなかった。まあ母さんが父さんに聞けばいいけど。

ガチャツ

「ただいま〜！」

「お帰りなさい、宏樹。シュークリームはちゃんと買えたかしら？」

「うん！買えたよー！」

なんか俺の喋り方が子供っぽくなっているが六割素であと四割は演技だ。意識したら大人っぽい話し方もできるがこの年だとこういう話し方のほうが親に変に思われなだろうと考えたからだ。ほとんど素なんだけどね……。

あ、そうだ

「お母さん、明日は家に居てって言ってたけどどうしたの？」

「あら？言わなかったかしら？明日は近くに母さんの友達が引っ越ししてくるのよ。」

「そうなんだ〜」

「ええ、神代未央っていうのよ楽しみだわ〜」

………神………代………？

まさか……ハハハツ……無いよね？それは……ないよね？

「お、お母さん？」

「どうしたの宏樹？」

「その人って……僕と同じくらいの子、いる？」

「ええ、いるわよ。宏樹と同じ四歳の娘がいるんだって。」

「……………」

「その子の名前はなんて言うの？」

頼む……！頼むぞ……！名前は違ってくれ……！！……！！

「神代悠美っていう名前よ」

ひろきは めのまえが まっくらに なった！

新しい世界で（後書き）

取りあえずなのはと合わせてみました。

次回

宏樹の前世の幼馴染、神代悠美が登場。

感想、誤字修正ありましたら指摘お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9165v/>

魔法少女リリカルなのは ~ 平和に生きる転生者 ~

2011年10月9日08時11分発行